ブダペスト通信

盛田　常夫

2023 年　NO. 26
11 月 3 日

混乱が続くリスト音楽院学長公募

リスト音楽院学長ヴィグ・アンドレア（Vigh Andrea）の学長任期は 10 月 31 日で 2 期 10 年の満了を迎えたが、後任の学長は決まっていない。2023 年初頭からリスト音楽院は次期学長選出をめぐって混乱状態が続いている。というのも、リスト音楽院を管轄している文化・イノヴェーション省（以下、文化省と略称）が公募で明示した応募条件は、特定人物を想定したものだったからである。その人物とはケラー・アンドラーシュ（Keller András, 1960-）。ケラーは国際的に活躍したヴァイオリニストで、2007 年からコンチェルト・ブダペスト・オーケストラ（Concerto Budapest Symphony Orchestra）の音楽監督として活動している。

事の起こりは文化省が支持する学長候補（ケラー）とリスト音楽院が支持する候補者が異なり、文化省によって公表された公募資格要件が、文化省が推すケラー任命を前提したものだったことだ。文化省の資格要件が公表されるごとに批判が寄せ

られ、何度も資格要件が変更されて混乱が広がった。しかし、文化省は一貫してケラーだけが有資格者となるように、資格要件としてクラシック音楽分野出身者、ソリストとしての国際的な評価を得た楽器奏者であることを明記し、最終的には国家顕彰を受けた者という条件まで付加した。まさに、ケラーだけがその資格に該当するように、応募条件が狭められるプロセスが続いた。ケラーに唯一欠けていた教授称号の資格を付けるために、新たに第二芸術アカデミーを設置して、コシュート賞を受賞していることを根拠に教授タイトルを獲得させるという手の込んだ根回しまで行った。

文化省が追加した諸条件にリスト音楽院のほとんどの教員が反対し、大学評議会もケラー任命を前提にした公募条件設定に反対を表明した。7 月初めの段階で、リスト音楽院 171 名の教員の抗議署名が大臣に届けられた。その後も 35 名の教員が署名し、さらには評議委員のうち教育研究者も賛同し、最終的にリスト音楽院の教員のほぼ全員に近い 223 名の教員・研究者が、文化省の学長公募規定は「音楽分野を差別し、リスト音楽院の自治権を犯すもの」という抗議書に賛同することになった。ここまで反対が広がった背景には、音楽界での評判が良くないケラー個人への不信感もあるが、当該大学の教員の意思を無視して特定の個人を押し付けようとするオルバン政権の強引さにたいする批判がある。

文化に手を突っ込みだしたオルバン首相

ほとんどの音楽家は、この一連の騒動の背景に、オルバン首相の意思が働いているとみている。応募条件を頻繁に変更し、執拗に特定人物に拘る理由が、管轄する文化・イノヴェーション大臣にはないからである。

社会科学系の学者に比べて、音楽を含めた芸術分野で活躍している文化人芸術家の政権支持率ははるかに高い。ところが、昨年から今年にかけて、オペラハウス支配人、国立劇場支配人、リスト音楽院学長の任命に、与党が暗黙裡に介入する事態が続き、文化人芸術家の間で分裂が起きている。特定の政治家と親交を得た一部の芸術家文化人が、政治力を利用して、現実的な利益を得ているからである。

科学アカデミーの組織改編を強引に進め、組織を分断することに成功したオルバン政権は、政治家にとって聖域であった学問や芸術の分野に、政治力を使って陰に陽に介入している。すでに国立大学への政府委員の派遣や、大学評議会への政治家

の送り込みを実現させた（このため、欧州委員会はハンガリーの主要大学がエラスムスプログラムに参加することを禁止した）。オルバン政権にとって、文化・芸術の領域といえども、政府の意向が貫徹できるものでなければならない。だから、いろいろな形で与党や政治家オルバンを支持してくれる文化人芸術家に便宜を図り、その代わりに与党の意向が通るようにしたいのだ。

しかし、今回のリスト音楽院の学長任命のようにあまりに強引に事を進めると、与党 Fidesz 支持の文化人芸術家の間に、利益を享受する者とそうでない者との分裂が起き、政治家オルバンのやり方に嫌悪感を抱く者を生み出すことがはっきりした。

スポンサーを失ったコンチェルト・ブダペスト

いろいろな音楽家に聞いても、ケラーの学長応募に首をかしげる人は多い。演奏家として優れた音楽家であることに疑問を持つ人はいないが、組織を率いる能力がある人物だと考えていない。逆に、組織のトップに立つべき人物ではないという意見が多数を占める。

ケラーが率いる Concerto Budapest は、旧 MATÁV オーケストラを引き継いだオケである。ハンガリーのテレコム会社である MATÁV が経営不振からドイツテレコムに身売りされ、2005 年からハンガリー・テレコム・オーケストラに名を変えた。しかし、民間企業になったテレコムはオーケストラを抱え続けることができず、スポンサーを失ったテレコムオケは 2009 年に名称を現在の Concerto Budapest に変えた。この名称変更と同時にケラーが音楽監督に就任したが、ここからこのオケの苦難の道が始まった。

この時にオーケストラの経営母体となる Concerto Akadémia Kft.という非営利法人が設立された。これが後述するように、2017 年に文化省が所有権を行使する同名の公益法人に変わった。文化省の公益法人とはいえ、政府が国の資金で運営するオペラハウス、国立フィル、国立劇場とは違い、オーケストラの運営資金が完全に保証されているわけではなく、一定の補助金を得て活動する一つの公益法人に過ぎない。それでも、このステイタスを得るために、いろいろな与党政治家の支援があったと考えるべきだろう。

オーケストラの運営に苦心するケラーはリスト音楽院で室内楽と指揮の授業を担当していた 2013 年、バッタ学長との間で、コンチェルト・ブダペストをリスト音楽

院の「レジデント・オーケストラ」とする合意を結んだとしている。ケラーによれば、国外での演奏会のために、担当授業を十分に行うことができないこともあって、コンチェルト・ブダペストのリハーサルを授業の一環として使うこともできることから、双方にとってメリットがある「レジデント・オーケストラ」という名称を使ったという。しかし、練習場の確保という便宜を図ってもらうことと、リスト音楽院を本拠とするオーケストラを公言することの間には、大きな飛躍がある。

有力スポンサーを失い、練習会場すら満足に確保できないコンチェルト・ブダペストにとって、バッタ学長との個人的合意は願ってもないことであった。しかしこの合意は学長が個人的に取り決めたもので、大学として正式な手続きを踏んだのではない。しかも、リスト音楽院には、教育の一環として、正式な学生オーケストラが存在する。一つの民間オーケストラすぎないコンチェルト・ブダペストが、「リスト音楽院レジデント・オーケストラ」を名乗るのはきわめて不可解であり、ヴィグ学長にのみならず、リスト音楽院の教員が不可解な関係解消に動いたことは理解できる。

2013 年にバッタ学長を受け継いだヴィグ学長はその就任と同時に、バッタ学長とケラーが取り決めた「レジデント・オーケストラ」という存在を認めない態度を明確にした。そのため、双方の関係が険悪化し、2015 年にケラーは大学教育から手を引くことを宣言し、コンチェルト・ブダペストもリスト音楽院レジデント・オーケトラという名称を取り下げた。この時に、ケラーは事の成り行きと自らの音楽教育構想を記した手紙をオルバン首相に送った。これがオルバン首相との関係の始まりである。

オルバン首相と親交を深めた結果、2017 年に、民間の非営利団体にすぎなかったConcerto Akadémia Kft.が当時の教育省を所有権行使者とする公益法人へと格上げされた。ここから、政府部内でもケラーを特別扱いするようになり、ヴィグ学長退任に合わせて、リスト音楽院学長任命への画策が立案されたのではないか。

付け加えれば、2015 年にリスト音楽院のレジデント・オーケストラの名称を否定されたコンチェルト・ブダペストは、現在、昨年（2022 年）に開館した Magyar Zene Háza（館長は元リスト音楽院学長バッタ・アンドラーシュ）を練習場としている。Zene Háza が特定のオケに便宜を与える理屈を見つけるのは難しいから、これもバッタ元学長との個人的関係だけでなく、政府与党の了解があってもことだろう。公益法人に格上げされたことが、ここで生きてきた。

音楽家ケラーの評判

音楽監督としてのケラーについては、あまり良い評判はない。リハーサルでオーケストラメンバーの誇りを傷つけるような言葉を吐いたことが報道され、そのために何人かのメンバーがオーケストラから去っている（この件で文化省は調査を行っている）。他方、ケラーは厳しく対処するのはオケの実力を上げるために不可欠だと考えているようだ。

ただ、同じく厳しい指導で知られた国立オケのコチシュ（Kocsis Zoltán, 1957–2016） とは、厳しさの内容が異なるようだ。コチシュのリハーサルも長時間長期間にわたるのが普通で、完璧主義者コチシュならではの指導だった。

コチシュは楽曲理解が速く深いことで知られている。自らが理解した内容をオーケストラメンバーに講義し、それを前提にリハを行う。だから、最初のリハーサルのほとんどが講義中心だった。今でもリハーサルのかなりの部分は大学の講義のようだったと、多くの国立フィルの団員が述懐している。団員は楽曲の理解力を高めてからリハーサルに入る。さらに、世界的なピアニストだったコチシュは間違った音を出すことを極端に嫌った。リハで間違った音を出したメンバーがいれば、すぐに演奏を止めて、厳しく叱責するのが常だった。しかし、コチシュの学識や演奏家としての実力を知る団員は、自らの間違いを恥じても、コチシュの厳しさを批判することはなかった。精神安定剤を服用して、リハに参加する団員もいた。緊張関係を緩めることがないリハーサルの連続で、オーケストラの実力を高めるのがコチシュのやり方であった。

これにたいして、ケラーは人格を傷つけるような言葉で批判すると考える楽団員が多いようだ。そのことが、音楽家ケラーへの尊敬の念を失わせている。厳しい指導で知られる二人だが、そこがコチシュと違うところだ。

公募不成立

ケラーは文化省の暗黙の支援を受けて学長候補に応募する姿勢を崩さなかったが、10 月になって文化省は公募の不成立を宣言した。これに伴い、ケラーは自身への批判が高まっていることを理由に、学長公募への応募を取り止める決断をした。ヴィグ学長の任期が切れた 11 月 1 日より、ヴィグ学長の許で副学長を務めたがクチャンスキーが学長代行を兼務することになった。

2023 年 11 月 3 日

オケのメンバーへの対応や政治家の支援を受けたことを否定的に見る音楽家がケラーのリスト音楽院学長立候補を不適切だと考え、他方で大多数のリスト音楽院の教員がケラーをごり押しする文化省の動きを大学自治への政治介入だと抗議した。Fidesz の事実上の専制政治が続くハンガリーでは珍しい抵抗姿勢である。政府与党もこれだけ抵抗されたのでは、これ以上の強硬突破は政府批判を強めることになると考えたのだろう。学長公募がこれ以上に政治問題化しないうちに、一歩退くことになった。

他方、ケラーがリスト音楽院にたいして抱いている批判の中には、傾聴に値するものもある。大学の教育水準を上げ、国際的な競争力を上げるために、教員や事務組織の在り方を変革する必要がある。そのためには強いリーダーシップをもつ人物が組織のトップに立つ必要がある。ただ、ケラーがリーダーとしてふさわしいかどうかは別問題である。政治家が押し付けたケラーにはリスト音楽院内部の支持がないことが明らかになった騒動だった。

2023 年 11 月 3 日